平成２８年度　地域懇談会（十王支所管内）　記録	
日　　時	平成２９年１月２９日（日）　午前１０時から１１時３０分まで
場　　所	十王交流センター　多目的室
出席人数	（１）市民　　１３人 （２）事務局　　教育長、教育部長、学務課職員、適正配置推進室職員 計１９人
内　　容	（１）学校の適正配置について （２）意見交換
事務局説明	（１）資料１について （２）小中学校適正規模に関する意識調査（途中集計）について［資料なし］ （３）日立市学校教育振興プランについて
意見交換	（ 意　見 ） 山部小廃校の噂が流れれば現状（の児童数）維持が難しくなる。学校側は「学校だより」などで学校の様子を丁寧に伝えてくれており、（そのような活動は）地域と一体で取り組める小さな学校ならではの良さである。小規模校は学力も高く、複式であっても先生方が懸命に指導に当たってくれている。（統廃合を考えるのではなく）山部地区に人を招くような事業をしてほしい。子供たちの将来を摘まないでほしい。山部小を残してほしい。 （ 事務局 ） 検討に入ったばかりであり、地域性も考慮しながら総合的に判断していきたい。 （ 意　見 ） 学校を通して地域がつながっている。他の学校に統合されると、地域の連携、存続ができない。地域のこと、生活のことも考えてほしい。 （ 意　見 ） 小さい学校では、きめ細かい指導もできるし地域とのつながりも濃い。 しかし、複式の欠点もある。（教員経験から）複式の授業の難しさ、ハンディがある。“子どものため”を考えれば、現在の状況では、いろいろな子どもと関わりながら成長していくことはできない。その点が義務教育では一番大切なこと。残念だが限界だ。 （ 質　問 ） 最終的には統廃合を考えているのか。櫛形小（の児童数）は、今後はどうなるのか。マンモス校では指導が行き届かず、落ちこぼれも出るのではないか。人が多すぎて、活発に活動できないのではないか。山部小に移して人数を調整する考えはあるか。できる限り統廃合を避けるとい

う考えはあるか。

（ 教育部長 ）

教育委員会としても、どちらがよいのかわからない状況である。数だけで進めて行けるような簡単なことではないと認識している。コミュニティとの関係もあるので、強引に進めることは考えていない。

子どものときに集団生活を経験することで、社会に出ていくときには力になる。学習指導は少人数の方が充実するだろう。

今後も懇談会等を開催しながら、ご意見を伺っていく。

（ 質　問 ）

国の手引の中では、適正配置・適正規模はどのようになっているのか。十王地区は適正な配置になっているのか。

スクールバスが出ている学校では、学年ごとの下校時間に対応できるのか。

（ 事務局 ）

小学校ではクラス替えができることなどを理由に１２学級以上、中学校ではクラス替えのほか、主要５教科で複数の教員を配置できるなどの理由で９学級以上が目安とされている。また、大規模校なりの課題の整理も必要とされている。

通学距離としては、小学校は４㎞以内、中学校は６㎞以内が目安となっているが、大事なことは、日立市としてどうかということだと考えている。

下校時間については、バスが小学校用１便と中学校用１便の計２便のみなので、低学年は高学年の下校時間まで待たせなければならない。

（ 意　見 ）

中学生は自転車通学が主である。街灯がない道を通らざるを得ないので、自転車であっても、女子生徒の保護者は心配している。統合ということになった場合、小学生だけでなく（希望があれば）中学生もスクールバスを使わせてほしい。

（ 意　見 ）

行政は縦割りだ。県営ＡＰを作っても入居したのは年寄りばかりだ。行政は何もやらないで、人が少なくなったから学校をなくすというのは違う。

（ 質　問 ）

ゆとり教育を受けていた子どもたちが成人しているが、ゆとり教育は失敗だったのか。土曜授業など、今になって授業時間を増やしている。

（ 事務局 ）

ゆとり教育に対する批判的論調が強いが、国際比較では、ゆとり世代の子どもたちが伸びている（上位に上がっている）。学び方を身につけているし、考える力がついている。ゆとり教育は、持っている知識や情報をつなぎ合わせ、足りないところを調べ判断する（考える）力をつける目的だった。

	（ 質　問 ） 　学力は落ちたのではないか。 （ 事務局 ） 　“学力”の捉え方である。詳細なことまで覚えなくても、基礎的な知識を組み合わせて解決する力がついてきている。 （ 質　問 ） 　山部地区では、以前、「児童を増やす会」を設立し行政にも訴えてきた。県営ＡＰを誘致すれば（若い人が）増えるだろうと。しかし、国・県の補助で建設したので入居者の規制はできないと言われ、年寄りばかりになってしまった。学区制がなければ、（山部地区の）住民には子どもを集める運動を展開する力はある。スクールバスを走らせてくれる考えはあるか。 （ 意　見 ） 　櫛形小学区の人で山部小に行くにはどうすればいいかと相談されたことがある。旧十王町の中で、山部小に行きたいと考えている人がいるか調べてほしい。現状では、児童数を増やすのは難しい。学級の人数は、３０人位がいい。櫛形小から各学年１５人程度移ってくれば、小規模校のよさが発揮できる。 （ 意　見 ） 　学校がなくなると、子どもたちが戻ってくる場所がなくなってしまう。共働きが多いので、児童クラブの迎えなど、子育てを近くに住む祖父母に手伝ってもらっている。学校が遠くなると祖父母からの支援も難しくなってしまう。少なくなってしまった子どもたちを増やす環境を整えてほしい。 （ 質　問 ） 　アンケートの結果は、市全体のものだと思う。山部地区に限れば「残してほしい」という声が多いと思う。山部小の廃校を前提にするのではなく、櫛形小から山部小に（児童を）移す方向で進めてほしい。 （ 事務局 ） 　これから詳細を検討していく。いろいろな可能性を考えていきたい。 （ 教育長 ） 　「日立としてどうするか」を深めていかなければならないと考える。学校に子どもたちを通わせている保護者、これから子どもたちを送り出す保護者の声も伺いたい。